

社団法人 安芸地区医師会の沿革

安芸地区医師会は、安芸郡の4町(府中、海田、熊野、坂)と広島市安芸区(船越・中野・瀬野・阿戸・矢野)と呉市(下蒲刈町、蒲刈町、音戸町、倉橋町)と江田島市(江田島町)からなる3市4町7行政区(人口約23万)に跨った地区医師会で、医療機関数約170、会員数357名(内勤務医会員180名)で構成されています。医師会館は、広島市東部交通の要衝である安芸郡海田町栄町にあり、敷地面積2,051㎡内に医師会事務局館・医師会館(中に臨床検査センターとホームヘルパーステーションが併設)・別館および総合介護センターの4棟で構成されています(H17.8.25 駐)。

当医師会の創立は、明治20年(1887年)に発会した「明廿^{めいじふた}医会」を母体とし、翌明治21年、安芸郡内在住の全医師(122名)の設立した「安芸医会」を始まりとします。明治35年に呉市が安芸郡より独立し、現在のような地区編成となりました。

戦中、戦後の混乱期、加藤鶴亀が会長を務め(昭和14年から昭和22年)、昭和22年、社団法人安芸郡医師会が発足、檜原月海が会長に就任しました(昭和22年から昭和28年)。

継いで会長となった皆川尚常(昭和28年から昭和56年)は、昭和37年より昭和42年まで広島県医師会長の任にもあたりました。安芸郡内には、当時の池田勇人首相と個人的に昵懇の医師も多く、皆川会長を中心に、健康保険制度の改正などに力を尽くしました。昭和37年には、安芸郡医師会館建設を提案し、昭和42年、安芸郡医師会館ならびに検査センターが完成しました。本検査センターは、郡部医師会としては全国最初のものであり、建設費および諸経費の一切を全額会員の負担で設立したことが誇りでありました。

八田博英会長(昭和56年から平成2年)は、学術や医療の研鑽と地域社会活動の推進を提唱し、昭和58年、他地区に先駆け、勤務医部会を再編しました。また、広島市の広域合併に対応し、同年、安芸郡医師会から現在の安芸地区医師会へ名称を変更しました。

平成4年の老人保健法の一部改正で、老人訪問看護制度が成立。高島義範会長(平成2年から平成10年)は、初期より「かかりつけ医推進事業」の重要性を認識し、全国で14医師会の「かかりつけ医推進モデル事業」の指定を受けるに至りました。そして、精力的に本事業に取組み、会員への啓発、病診連携システムの構築、行政との連携、また住民への広報、地域住民を対象としたテレフォニッククリニックの開設など次々と事業を展開しました。以降、在宅医療を医師会事業の中核に据え、本事業は安芸地区医師会の特色となっております。平成5年より、いよいよ「かかりつけ医推進モデル事業」と「老人訪問看護ステーション事業」がスタートし、広島県下で7番目の老人訪問看護ステーションである安芸地区医師会老人訪問看護ステーション(平成10年に安芸地区医師会訪問看護ステーションと名称変更)を開設、運営を開始しました。平成7年には江田島町の訪問看護ステーション開設にも協力しております。

平成10年より現会長福永泰州が引き継ぎ、介護保険制度のスタートに合わせ、平成10年、海田町在宅介護支援センター、翌11年、ホームヘルパーステーションを開設しました。これにより、訪問看護ステーションとともに、在宅医療のますますの充実をはかりました。現在も、利用者数の増加に伴い、府中、熊野、船越へと訪問看護ステーションを新設し、総合介護センターと組織替えをし、更なる発展を遂げております。

地区内の病院とは親密な関係を築き、マツダ病院、済生会広島病院、安芸市民病院と定期的に病診連携連絡会議を開催しております(存続が懸念されていた国立療養所畑賀病院は、平成13年に広島市医師会運営・安芸市民病院へ移管され、引続き地域の重要な拠点病院として機能しております)。また、呉共済病院、済生会呉病院とも病診連携連絡会議を開き、交流、研修の場としています。

会員および従業員を対象にしたレクリエーションなどの行事、学校医他地域医療への

貢献、16の委員会や5つの運営会議を設け、多くの会員が活発に活動すすめています。研修の場として、月例の学術講演会だけでなく、パラメディカルを含めて毎年開催される安芸医学会は20回を数え、50数題の演題が呈示され、300名以上の出席者で盛大に開催されています。

月報および年一回の会誌「あき」を刊行し、その他、近年の刊行物として、安芸郡医師会史(昭和52年)、安芸地区医師会百年史(昭和62年)、『かかりつけ医推進モデル事業』事業報告書(平成7年)、安芸地区医師会訪問看護ステーション5周年記念誌(平成10年)などがあります。